今こそ人類人主義を！

――国際主義を超えて、エスペラントの内在思想を深めたい

ソ連侵攻と敗戦で生まれた残留婦人と孤児たち

大類善啓（会員）

中国が文化大革命を終え、新たな改革開放政策に舵を切った１９８０年代には、日中関係でも新たな現象がいろいろと現れた。その一つが思いもしなかった旧満洲からの残留日本婦人や孤児たちの姿だった。それは大きな衝撃を人々に与えた。

旧満洲で残留せざるを得なかった日本の婦人や孤児たちは、中国人にもらわれたり、買われたりした。子どもたちはその後成長し、残留婦人たちも肉親を探し求めて来日した。テレビでは親やきょうだいらとの涙の中での再会などが映し出されていた。実の母との再会などの画面を見て、涙を流した視聴者も多かっただろう。

中には、中国で築いた家族と新たな別れをして日本に引き揚げてきた人たちもいた。「お前は日本人なのだ。祖国へ帰っていい」と、あたたかく送り出してくれた家もあっただろう。しかし、泣く泣く引き裂かれた家族もいて新たな悲劇も生まれたのだ。そのような中にあって、中国に留まる残留日本婦人もいた。

日本に帰るだけが「幸せの道」ではない。中国に留まり現在の家族と過ごす人たちである。そのような人たちを支援することも大事なことだと、紆余曲折を経ながらも１９９１年５月、「方正（ほうまさ）地区支援交流の会」を友人たちが立ち上げ、私もその活動の末端にいた。この活動の過程で、ハルビン市の郊外にある方正県に日本人公墓があることを初めて知った。

なぜ方正地区の残留婦人や孤児だったのか

ハルビンから東へ１８０㎞にある方正県には、残留婦人や孤児たちが一番多かった。支援の対象を中国東北部全体の残留者まで入れると大変だ。まず、残留婦人や孤児たちが一番多く生まれた方正地区を支援しようと会は成立し、１９９３年７月初めて訪中団を組織して方正を訪問した。その折り日本人公墓を参拝した。

初めて公墓を前にして、なぜ加害者でもあった「開拓民」たちの公墓を、被害を受けた中国が建てたのか。この立場が反対だったらどうだろうかと思った。日本政府が中国人たちの墓を建てるだろうか。私は、否、たぶん建てることはないだろうと思った。

会の事務局長として訪中団の秘書長的な役割をした牧野八郎氏が司祭として古神道式の祭式で慰霊し、10人近い参加者は公墓に参拝した。その後２０１１年６

月、我々の活動で公墓の存在を知った高野山真言宗の僧侶12人が真言宗の法衣を着て慰霊した。ところが今や、方正県政府は中国の〝愛国青年〟なる右派の声におびえて、宗教的祭式による慰霊はもちろん、公墓参拝の写真撮影も許さないのだ。それを思うと、当時はいかに寛大であったか。方正県政府は日本人公墓を訪ねる日本の人たちを歓迎したのである。

なぜ方正を「ほうせい」と呼ばず「ほうまさ」と呼ぶのか。旧満洲にいた多くの日本人たちは、黒竜江省にある宝清（ほうせい）県と区別するために、この地を「ほうせい」と呼ばずに「ほうまさ」と呼ぶようになり、私たちも旧満洲にいた人たちの思いを込めて、そのように呼んでいるのである。

敗戦後の中国農民の怒りと決死の逃避行

１９４５年の８月９日、ソ連軍は突如、「満洲」に侵攻した。続く８月15日、日本は敗戦した。と同時に、昨日まで隣人として、にこにこと微笑んでいた中国の農民たちは、たちまち、日本人の家屋に押し入り、日本人たちに襲いかかり家財道具を持ち出した。

「開拓民」と呼ばれる人たちが北満や東満と呼ばれるソ連との国境近くには多くいた。しかし「開拓」といっても、本来の意味での開拓ではない。日本政府は関東軍の後ろ盾で中国の農民たちから土地を安く買いたたき、また、すでに耕作地としてあった土地を奪い、「開拓民」たちに与えたのだ。満蒙開拓が国策と言われる所以であり、いわば「開拓民」は当時の中国農民にとっては侵略の先兵であり、来たるべきソ連との軍事衝突を予想した人間の盾でもあったのだ。

日本の敗戦と同時に、土地を奪われた中国の農民たちの怒りが爆発したのである。「開拓団」にいた日本人たちはたちまち難民と化し、逃避行を続けた。

昼間はソ連軍や中国人たちの襲撃に遭うというので山に隠れてやり過ごし、夜になると歩き出し、方正を目指したのだ。「方正に行けば関東軍がいる。軍の食糧基地がある」と聞いていた人々は、方正にたどり着けばなんとか助かると思ったのだ。方正に着けば、その先にはハルビンがある。そして日本へ帰れると思ったのである。

逃亡の過程では、泣き叫ぶ幼い子どもをそのままにしておくと、怒りに燃えた中国人たちやソ連軍に見つかるということで団長から命令され、時に幼子を扼殺せざるを得ない母親もいた。中には、ソ連軍の攻撃とともに婦人たちは凌辱されるだろう、どうせ殺されるなら集団自決しようと決めた開拓団もあった。その中でも有名なのが「麻山事件」と呼ばれた集団自決だった。そのような過酷な逃避行が２〜３か月続き、やっと方正にたどり着いたのである。

しかし関東軍はすでにいなかった。なんとか方正の収容所に収容されたはいいが、飢餓と発疹チフスで続々と死者が出た。その数は５０００人近いと言われる。その凍りついた多くの遺体は、１９４５年の秋から翌年の春にかけて溶け出し、異臭と悪臭を放った。このまま放置すると伝染病が蔓延するだろうと、中国東北部をいち早く支配した八路軍は、ガソリンを３日３晩かけて遺体を焼いたという。そして方正の山のほうに捨てた。

ある残留婦人の訴えた願い

山形県天童市出身の松田ちゑさんも残留せざるを得なかった婦人の一人だった。「中国人の嫁になるなんて絶対嫌だ」と言い張っていた松田さんも、生きていくには中国人の嫁になるしかない。そう決めて、紹介された崔さんという善良な農民の妻になった。

１９６３年、毛沢東の大躍進の失敗は

たいへんな被害を中国の人々にもたらした。一説には、２０００万の餓死者を生み出したという。そのため、当時の中国政府は耕せる土地があるなら、食糧を自分たちで調達していいという指令を出した。

松田さんは同じ残留婦人である佐藤栄さんと話し合った。そして松田さんは耕せる土地を求めて方正の山に入って行った。そしてそこに、累々たる白骨の山を見つけたのだ。松田さんにはすぐわかった。１９４５年の秋から翌年の冬にかけて亡くなった同胞たちの白骨であることを。

野良犬が白骨を食い散らし、子どもたちが足蹴にしている姿を見て松田さんは、こんな状態になっている姿を日本政府は知っているのだろうかと思った。そして佐藤さんと語らい、なんとか自分たちで葬ることはできないだろうかと相談し、松田さんは翌日一人、県政府を訪ね、自分たちで葬りますから許可してほしいと嘆願した。

県政府はさてどうするか考えた。「侵略者の白骨など知るものか。そのままにしておけ」と言ってもおかしくはない。しかし当時の県政府は違った。上部機関の黒竜江省政府に判断を委ねた。省政府も判断しかね、北京の中央政府に松田さんの願いが届いた。陳毅外相から総理の周恩来までに松田さんの願いは伝えられた。周恩来は熟慮の末、「開拓民といえども日本の軍国主義の犠牲者である。丁重に葬るように」という指令を出した。

軍国主義と日本人民を区別した周恩来総理の思想の拠って立つところは、いわば国際主義的精神である。方正日本人公墓は、いわば国際主義的精神の賜物なのだ。１９６３年、まだ国交が回復する９年前のことである。

日本人公墓の存在を知ってもらおう

「方正地区支援交流の会」は方正県にＯＤＡの予算を使って経済援助を行い、日本語学校に教材などを寄贈したりしたが、会長の石井貫一氏も亡くなり、会はやや停滞した。ちなみに石井氏は、いわゆる「満洲国」の副県長を務めたこともある人である。

会を存続させるか、それとも解散するかと、私を含めて６人ほどが討議した。その折り、今は亡き奥村正雄氏が、「なんらかの形で会を存続させよう。そして我々年寄りは一歩引き下がり、若い人に任せよう」と言った。集まった中で私が一人、みんなより10歳ほど若く、おのずと私が責任者として会を存続させるかどうかという風になった。

私は、経済援助などできる力はないが、知られざる日本人公墓の存在をより多くの人たちに知ってもらい、公墓建立の思想的根拠である国際主義的な精神を広める活動ならやってもいいと答えた。みんな賛同してくれ、２００５年「方正友好交流の会」が発足し、会報「星火方正」を年に２回発行し、昨年の12月、33号を発行した。

星の光はとても小さな火だ。今は小さな野火にすぎないが、やがて燎原の火のように、方正から平和と国際主義的精神が広まるのだという思いを込めて、会報の名前にし、その由来を表紙裏に記した。

今や「国際主義」は風前の灯

ところが、この「国際主義」が今や風前の灯なのだ。

我々の会の仲間に飯白栄助さんという方がいた。両親は東京・品川区の戸越銀座で乾物商を営んでいたが、戦況が厳しくなり荷物の輸送もままならず、物は来ない。そして１９４４年４月、第13次興安東京開拓団として家族４人で満洲へ行くことになった。１９３３年生まれの飯白さんは当時11歳である。

その開拓団は敗戦で８００人が逃避行し、その過程で３０３人が集団自決した

が、飯白さんと姉は生き残った。敗戦後、中国に残った飯白さんは解放軍に入り、朝鮮戦争にも参加した稀有の体験の持ち主である。

２０１０年５月、第６回方正友好交流の会総会後の講演会で飯白さんに話をしてもらった。その折りこんな話があった。

解放軍に入ったところ、飯白さんはよく中国人兵士から、日本人の蔑称である「小日本」「日本鬼子」と言われた。そう言われると飯白さんは怒り、すぐ喧嘩になった。すると幹部が飛んで来て、まず中国人兵士を叱った。その後、飯白さんに「お前も民族意識が強すぎる。日本鬼子というのは、当時の日本の侵略者の象徴だからお前が気にすることはない」と諌められ、「お前は国際主義的精神が足りない」と諭すのだった。当時は、地方の末端の共産党幹部でも国際主義的精神が横溢していたのだ。

ところが近年はどうだ。中国現代史研究家の村田忠禧氏（横浜国立大学名誉教授）が、過去にさかのぼって「人民日報」の社説に出てくる単語の頻出度を調べたところ、「国際主義」という言葉は年毎に減り、それに代わって「愛国主義」なる言葉が頻繁に表れるようになったという。その話を聞いたのは２０１３年ごろだったと思う。とりわけ江沢民が主席になって以降、大手を振って愛国主義という排他的な姿勢が目立っていくのである。

改めて村田さんの研究成果を見てみると、１９８８年の第14回党大会にいたると、党規約からも国際主義という言葉は削除されたという。

国家とは、日本とは何なのか

２０１３年ごろからだろうか。尖閣問題などの領土問題が浮上すると、決まって日中の政府高官から「わが国固有の領土」という言葉が頻繁に出てきたが、そもそも議論の前提になっている「日本」にしろ「中国」にしろ、いわゆる国民国家なる概念はたかだか明治維新以降に出てきたものだと言えるだろう。

それ以前の人々は、藩という観念に支配され、薩摩だ、肥後だ、長州だと争い、競い合っていたのである。「俺は長州人だ」「わしは薩摩隼人だ」と自己規定していたのだ。「日本人」としておのれを捉えていたわけではない。もちろん日本を「国家」として認定していたわけではない。天皇にしても、江戸時代以前の庶民にとって天皇なるものは、存在さえ疑わしいほど希薄なものだったのである。

歴史家である網野善彦氏によれば、「日本」という名前が登場するのは、８世紀初頭に勢力を振るっていた一族が本州の西南部や九州の北部をめぐって領土の支配を確立した時のようである。その最高権力者が「天の王」を意味する天皇という称号を与えられたという。要するに「日本」とは、ある特定の一族によって支配された政治的な単位だったのだ。

そのような事情を勘案すると、おのずと国家や日本なるものは極めて相対的な存在であり、そのようなものを前提にすることの愚かしさが見えてきはしないだろうか。

国際主義よ、去らば。今こそ人類人主義を！

国際主義も畢竟、国家を前提にしているのだ。国家の成立要件として基本的に考えられるのは「国民」「領土」「主権」だろう。しかし今、国家を前提とすることが正しいのかと思うのである。その思考の限界を考える時代に来ているのではないか。

「私は日本の国民である」「私は日本人である」といったような日本＝国家を前提として考え、行動することの時代的な古さなど、現代世界を考える時、その思考の狭量さを思う時代が到来しているの

である。

ポーランド出身のユダヤ人政治思想家であるアイザック・ドイッチャーは、すでに１９６０年代半ばにこう語っている。

「一民族だけの国家などというものはすべて時代錯誤的存在である。どうしてこれがまだ理解されないのであろうか。原子のエネルギーが日一日と地球を矮小化し、人類は宇宙旅行をはじめ、人工衛星が「大民族国家」の上空を１、２分で飛びまわっている時代になれば、技術的な進歩は民族国家などというものをふるくさい馬鹿ばかしい存在にしてしまうのはわかりきったことではないか。それはたとえるならば、蒸気機関が発明された時代に中世の封建的領主制が愚劣な時代遅れのものと化したのと同様である」

（『非ユダヤ的ユダヤ人』鈴木一郎訳）

国民国家や民族国家の一員として自己を捉えることの時代遅れ、その滑稽さを今こそ認識すべきではないだろうか。

ここに来て、エスペラントという世界共通語を創造したザメンホフの思想である人類人主義に、新たな未来への光を見出したいのである。

ザメンホフの人類人主義とは、エスペラントでＨＯＭＡＲＡＮＩＳＭＯ、ホマラニスモと言う。ホマーロとは人類、アーノは一員、イスモは主義、「我々は人類の一員である」という考えである。

「私は日本人である」「私は中国人である」「私はアメリカ人である」といった所属する国家の一員として自己規定するのではなく、この世の大地に生きるひとりひとりの個人を出発点として、この世界を考え、人類の一員として発想し行動するのだ。

ザメンホフの言葉でいえば、次のようになる。

「すべての民族は同等の権利を有する人類の一部であると考え、私はその出生民族によってではなく、その人個人の生み出す価値と行動によって人を判断します。自分とは違う民族であるとか、違った言語や宗教であるとかで人を攻撃したり、迫害することは野蛮的な行動であると考えます」（ザメンホフ著『国際語序文と全教程』、１８８７年、最初にエスペラント博士著として発表した、いわゆる第一書と呼ばれるもの）

アイデンティティは一つではない

毎年1月1日に開催されるウイーンのニューイヤーコンサートは、全世界にテレビ中継されるほどの新年恒例の行事になっている。２０２２年のコンサートの指揮者はダニエル・バレンボイムだった。

昨年は無観客で演奏されたが、今年は観客を入れて開催された。会場にいた聴衆は一人残らずマスク姿だった。こんな光景を見るのは初めてのことである。

そしてバレンボイムは、演奏途中の挨拶の中で、コロナ感染に触れ、「人類全体の問題である」云々といった言葉を発した。

まさにコロナ感染を防御し、次なる災禍を防ぐには人類的な発想で考えなければならない時代に来たことを、誰もが実感したことだろう。環境問題一つを取っても世界的な視野、全地球的な発想と行動をもってしか解決できない時代であることを、実感を持って人々は理解したのではないだろうか。

まさにエスペラントの内在思想である人類人主義がやっと今、世界の人々に理解される時代になったのだ。あるいは、やっと現実の世界がザメンホフの思想に近づいてきたと言っていいだろう。

バレンボイムは彼の自伝の中でこんなことを書いている。

「私は21世紀が始まった今、アイデンティティは一つだと主張して人々を納得させることは誰にもできないと思う。私

たちの時代が抱える問題の一つは、人々がますます小さな、局所的なことにしか関心をもたなくなり、物事がどのように混じり合い、どのように集まって全体の一部となっているか、ほとんど認識していない場合がしばしばあるということだ。

（中略）私はアイデンティティの問題を、音楽家として、また同時に、自分が送ってきた人生という観点から見つめている。私の祖父母はロシア系ユダヤ人で、私自身はアルゼンチンで生まれ、イスラエルで育ち、大人になってからは人生の大半をヨーロッパで過ごした。私はその時その時で、たまたま話すことになった言語で考える。またベートーヴェンを指揮する時には自分をドイツ人のように感じるし、ヴェルディを指揮する時にはイタリア人のように感じる。それでも、自分自身に不誠実だという感じはない。それどころかまったく反対である」と書いている。（『ダニエル・バレンボイム自伝』２００２年イギリス、２００３年、増補改訂版、蓑田洋子訳）

まさにアイデンティティは一つでないのだ。自己を一つの所属先だけに規定することはない。多様な所属先があるのが実は自然なことなのだと言えるだろう。

ザメンホフとはどういう人だったか

ルドヴィーコ・ラザーロ・ザメンホフは１８５９年、現在のポーランドの東部、ベラルーシとの国境に近いビャウィストクに生まれた。当時はロシア帝国の支配下にあったリトアニア領の地だった。

現在、ビャウィストクはポーランドにあることもあって、しばしばザメンホフをポーランド人として誤って報じられることがある。しかしザメンホフは両親ともにユダヤ人だった。ただ父親は、教育者で宗教にこだわらず、無神論者であったが母は熱心なユダヤ教徒だった。その両親の下、ザメンホフは長男として生まれ、その下に4人の弟、3人の妹がいた。

当時のビャウィストクでは、ユダヤ人、ポーランド人、ロシア人、ドイツ人、ウクライナ人たちが暮らしていたが、その人口構成は、ユダヤ人が66％、ポーランド人が18％、ロシア人が８％、ドイツ人が６％、ウクライナ人が２％ほどだった。（田中克彦著『エスペラント 異端の言語』）

ユダヤ人が圧倒的に多かったが、東欧に根強い反ユダヤ主義の中でユダヤ人たちは差別されていた。当時のユダヤ人たちは東欧のユダヤ人の共通語とも言うべきイディッシュ語を話していた。その言葉は非常にドイツ語に近く、「崩れたドイツ語」と揶揄された言葉である。今でも少数だが一部のユダヤ人が使っている。

そのイディッシュ語で書かれた小説に『牛乳屋テヴィエ』がある。ショレム・アレイヘムが書いた作品だが、『屋根の上のバイオリン弾き』という有名なミュージカル作品の原作である。主人公は、ユダヤの伝統と信仰を守る牛乳屋のテヴィエだが、父親の彼に反抗するかのように娘たちは異教徒や革命家の青年たちと結婚し、次々と親元を離れていく物語だ。

ビャウィストクでは言葉の違いから、市場や通りで喧嘩が絶えなかったという。喧嘩になると野次馬が集まってくる。ロシア人の警官が仲裁に入るが、リトアニアの女が話す言葉がわからない。警官は「ここはロシア皇帝の領土だ。ロシア語で話せ」と怒り出すのだ。

小さい時からこのような光景を見ていたザメンホフは、「人間はみんなきょうだいだと教えられていたのに」と思い、「大きくなったら、きっとこの不幸をなくしてみせるぞ」と、絶えず独り言を繰り返すような少年だった。

少年のころから心優しいザメンホフは、

言葉が通じないために争いや誤解が生じる状況を見て育ち、そこから世界共通語の夢を育んでいったのだった。

世界共通語を創ろう

ザメンホフ一家は、ビャウィストクからワルシャワに移った。成績優秀なザメンホフはその後、選ばれてモスクワ大学医学部に入学する。同級生には後に有名になった作家のチェーホフがいた。ザメンホフは、成績は良かったがユダヤ人故に家庭教師にもなれず、また学費も続かず、ワルシャワに戻るのだった。１８８１年のことである。

その年のクリスマスのワルシャワで、ユダヤ人へのポグロムが起こった。ロシア語で大虐殺の意味である。ザメンホフの家族は３日間、地下室に逃れ、なんとか命拾いをした。ザメンホフはこの体験をして現実は改めて厳しいと認識したのだった。しかし、人類のために世界共通語を創るという夢はどうしても捨て去ることができなかった。

周囲の状況を見渡せば、ポーランド人はロシア語を嫌い、ロシア人はドイツ語を嫌い、ドイツ人はフランスが好きになれない。フランス人は英語を受け入れようとしない現実を見ると、ますます世界共通語の必要性を感じるのだった。

ザメンホフはラテン語も理解でき、またロシア語もポーランド語も話せたが、人類の共通語の夢は持ち続けた。そして共通語は、誰にとっても学びやすく、現にあるどの民族言語にも偏らない中立性を持っていること、発音がやさしいこと、文法は規則的で例外事項は存在しないことなどと熟慮し、苦労に苦労を重ねて世界共通語エスペラントを創りだしたのである。

レフ・トルストイ、ロマン・ロランも共感した

１８８７年、ザメンホフはついに「リングヴォ・インテルナツィーア」（国際語の意）をエスペラント博士という名前で発表した。エスペラントとは希望する人という意味で、ザメンホフはこの冊子を当時のヨーロッパで影響力のある知識人に贈った。

レフ・トルストイは感激し、「エスペラントを普及させることは地上に神の国を創ることを助けることである、これこそ人類の理想だ」という手紙をザメンホフに送った。ロマン・ロランも、「世界語は最も平和的な、最も働きのある、最も武装せずして、しかも最も効果的な、ある革命の一つである。それは政治的な革命よりいっそう深いものである。何故ならそれは、社会の輪郭を改造するばかりでなく、人類の精神をも改造するからである。それは覚らずして新しい信仰、新しい神たる人類を運ぶ乗り物である。エスペラントは人類解放の武器である」という言葉を贈り、エスペラントを支持したのだった。

マクシム・ゴーリキーも「保守的な人々は、エスペラントを空想的な仕事だと頑強に言い張っている。しかし現実は、確実に保守的な人々の考えを覆していく」と称賛した。

そうした知識人たちの影響もあり、エスペラントは徐々に人々の中に浸透し、１９０５年にはドーバー海峡に臨むフランスのブローニュ・シュル・メールで第１回「世界エスペラント大会」を開くまでになり、世界各地から６６８人が集まった。参加した人々がお互いにエスペラントを通じて話すのを見てザメンホフは感激し、「ここでロシア人とフランス人が会ったのでない。ポーランド人とイギリス人が出会ったのではない」と言い、国籍で区別するのではなく、それぞれの固有の名前をもつ人々が出会ったことを讃えた。

そして「緑星旗下の祈り」という詩を発表した。緑の星はエスペラントを表すシンボルである。しかしこの詩の最後の部分をフランス人たちの反対で読み上げることができなかった。それは次のような詩だ。

兄弟よ、一つにまとまって手を握りなさい。平和の武器をもって前へ進みなさい！

キリスト教徒もユダヤ教徒もイスラム教徒も、私たちはみんな神の子です。

ザメンホフはこの「祈り」の最後の部分の削除を要求された時、あまりのくやしさに泣き出してしまったという。最終的に妥協してこの最後の部分を彼は読み上げなかった。

ヨーロッパというキリスト教世界の中で、ユダヤ教徒もイスラム教徒もみんな神の子だと詠ったザメンホフ。エスペラントは単なる言葉の一つに過ぎないという意見に対して、商売や実用にしか役に立たないエスペラントならば、ないほうがましだと言い切ったのもザメンホフだった。

予言者としてのザメンホフ

ザメンホフについて、私がもう一つ強調しておきたいのは、予言者としての側面である。ワルシャワでポグロムに遭うも、なんとか助かったザメンホフはここに来て、やはりユダヤ人の国を創らなければユダヤ人たちは救われないのかと思い、イスラエルのシオンの丘に教会を建てようというシオニズム運動に積極的に参加するようになり、ワルシャワのリーダーまでになった。

しかし、運動の中に入ってザメンホフは改めて思ったのだ。このシオニズム運動によって建設されるイスラエル国家は、究極的にはパレスチナにいるアラブ系住民を排除して成立するだろう。それはユダヤ民族主義の国になるだろう。イスラエル建国は、離散するユダヤ人たちの真の解決にはならないだろうとシオニズムと決別するのだった。

まさにザメンホフの予言通り、１９４８年のイスラエル建国と同時に、アラブ諸国との戦争が始まり、今なおイスラエルとアラブ諸国との対立はますます深まるばかりである。私は、予言者としてのザメンホフの洞察力をもっともっと評価すべきだと思う。と同時に、ザメンホフの言う人類人主義こそ、今求められているものだと改めて思うのである。

長谷川テルを見直そう

さて、この人類人主義を体現したように生きた日本のエスペランティストを挙げるとするなら、私は何といっても長谷川テル（以下、テルという）がその代表的な存在だと思う。

テルは、１９１２年３月、山梨県の猿橋（現、大月市）で生まれたが、一家はその後、東京に移り、東京府立第３高女に入学後、奈良女子高等師範学校、現在の奈良女子大学国文科に進学した。

１９３１年９月18日、柳条湖事件が勃発した。「中国軍が満鉄線を爆破した」と言って関東軍が中国を攻撃したのである。いわゆる「満洲事変」である。そして翌年、日本は〝満洲国〟を「建国」した。テルはこのような時代に青年時代を過ごしたのだ。同じクラスにいた中国からの留学生たちは「このような時期に日本にいることはできない」と帰国した。

この学生時代にエスペラントを学んだテルは、日本プロレタリア文化連盟などに近づいたが、その連盟のメンバーたちが検挙され、テルもシンパとみなされ警察に連行され退学させられた。

そして東京に戻った彼女はエスペラントを通じて〝満洲国〟から留学していた劉仁と出会い、恋愛し結婚した。

その後、盧溝橋事件が起こり、日中は本格的な戦争の始まりを迎えるのだった。テルたちは日本を離れて中国に渡った。中国語ができないテルだが、日本から伝わったエスペラントを習得していた中国のエスペランティストたちと親しく付き合った。

１９３７年８月には日本海軍は上海で中国軍に攻撃を加え、８月15日には日本政府は南京政府を「断固応懲する」という声明を出し、首都南京を攻撃した。テルは日本の友人たちに次のような公開の手紙を書いた。

「お望みならば、どうぞ私を売国奴と呼んでくださっても結構です。私は、これっぽっちもおそれはしません。むしろ、私は他民族の国土を侵略するばかりか、なんの罪もない無力な難民の上に、この世の地獄を現出させて平然としている人びとと同じ民族のひとりであることを恥とします。ほんとうの愛国主義は、人類の進化とけっして対立するものではありません。でなければ、それは排外主義なのです」（長谷川テル著『嵐の中のささやき』）

周恩来もテルを讃えた

時代は、進歩的な言説を吐いていた日本の著名な知識人たちが時流に乗るかのように変節していた。テルたちは上海を出て漢口に向かい、そこで郭沫若やエスペランティストの胡愈之らの計らいで国民党中央部国際宣伝処対日科に迎えられ、テルはマイクの前で日本軍の将兵たちに日本語でこう訴えた。

「日本の将兵の皆さん！　皆さんは、この戦争は聖戦だと教え込まれ、そう信じているかもしれませんが、果たしてそうでしょうか。違います。この戦争は、大資本家と軍部の野合世帯である軍事ファシストが、自分たちの利益のために起こした侵略戦争なのです。日本にいるあなた方の家族は、おなかをすかせて、ひどく苦しんでいます」（高杉一郎著『中国の緑の星』）

テル夫妻はその後、国民党から離れて中国共産党に共感していく。テルの文章は、周恩来が指導していた『新華日報』や延安から発行されていた『解放日報』にも発表されていった。テルは日中戦争だけでなく、１９３６年から始まったスペイン戦争にも言及するほど世界的視野を持っていた。

１９４１年７月27日、重慶の文化人たちが集まる席で周恩来はテルに対し、「日本の帝国主義者はあなたを売国奴のアナウンサーと言っていますが、あなたは日本人民の忠実な娘であり、真の愛国者です」と褒め讃えた。

日本の敗戦後、テル夫妻は瀋陽に行き、２人目の子ども、劉暁蘭が生まれた。その後、佳木斯（ジャムス）に向かった。この地で３人目の子どもを孕んだが流産する道を選ぶ。しかし手術は失敗し、当時の不衛生な手術器具から感染症になり命を落とした。その３か月後、身体が弱かった劉仁も後を追うように亡くなった。今２人は、佳木斯の烈士陵園に、平和のために闘った「国際主義戦士」と丁重に葬られている。

第２次世界大戦を経て77年、強権的な独裁者が相次いで出現し、狭隘な民族主義や「愛国主義」なるものが跋扈する現代世界を考える時、ザメンホフの人類人主義を今一度我々の中に甦らせたいものと思うのは私だけではないと思う。